

角信順すみしんじゆんの忠義

角氏は筑後国水田みづた荘（現福岡県筑後市水田）に所在する水田天満宮の宮司（あるいは別当とも）の家で、太宰府天満宮留守職をつとめた大鳥居氏の一族です。

留守職というのは、別当（長官）が在京しているため太宰府現地において寺務を管掌した代理職のこと、大鳥居氏と小鳥居氏とが数年交替で勤めるようになっていました。しかし、この取り決めは次第に守られなくなり、戦国時代、両氏は留守職をめぐる鋭く対立します。

戦国大名大内氏が筑前を治めていた時代は、小鳥居氏が優勢だったのですが、弘治3年（1557年）に大内氏が毛利氏に滅ぼされると両者の関係が逆転し、永禄元年（1558年）10月、大友氏より筑後国内の留守領を安堵されたことを梃子に、大鳥居氏は翌2年頃、再び留守職としての実質を備えるようです。

おそらくこの時期に記されたと考えられる角信順覚書は、弘治2年から永禄2年頃の大鳥居氏と小鳥居氏との攻防を詳細に記した興味深い史

料です。

この中で信順は、弘治3年12月の天満宮の祭礼で、岩屋城督高橋鑑種と小鳥居氏とが大鳥居氏抜きに行事を執り行おうとしたことに腹を立て、老体の身で命が惜しくないの大宰府に登り回廊で腹を切ろうと思ふなど、激しい一面を見せています。

また、主家大鳥居氏に対しても、ここ数代の実態として、不信心で、万事に自分勝手であり、百姓らに無理難題ばかり言い、「上見ぬ鷲の体」（驕り高ぶった様子）であると非難するとともに、年若い主である大鳥居信渠に対しては、ここ二、三代の誤った心構えを改め、正しい道理と公正さを持ち、百姓らを育み、武芸の学びをやめ、堅く神慮を仰ぐという請願を立てるよう、厳しく諭しています。

戦国時代では社家といえども戦乱と無関係ではなく、むしろ武士化して戦乱に巻き込まれる状況にありました。そうした中で、主家を盛り立てようとする信順の純粋かつ熱い思いをこの史料から読み取ることができます。

太宰府人物志

資料室だより 57

市史資料室

朱雀 信城